回想録

　昨年、戦後７０周年を迎えました。終戦間際の東京で歯科女子学生として勉学に励んでいた「木村ミツ」先生に貴重な体験談を寄稿いただいたのでご紹介いたします。

　昭和17年東洋女子歯科専門学校入学のため兄と上京、隅田堤の見事な桜並木、新築の富士寮入寮。ここで生涯の友となる青森県出身の西田さん山形県の太田さんと出会った。上京時は何事も珍しく、上野美術館で油絵を見ては感激、見たることない手法に驚く。誰かと喧嘩し淋しくなると上野動物園へ、猿山を見て心を和やかにした。将来、お給料を貰ったら猿を飼うと思った。

　みんながヒモジクなると、お小遣いを出し合って片道の電車賃を工面、順番に調達に出向いた。私の場合は、兄が北海道炭礦汽船の東京本社に勤務していたのでお小遣いをもらったが、兄がいない時は兄嫁が農作物を支給してくれました。

　４月頃かと思う、昼休み部屋で３人でおしゃべりしていたら、飛行機の爆音が聞こえてきた、窓から身を乗り出して見る。「見たこともない飛行機だネ」と云った途端に空襲警報、転がるように部屋を飛び出して校舎の地下へ、洗濯流し台に潜り「神様助けて、父さん母さん助けて」。また、ある晩の空襲では、足の悪い友人が大きなリックサックを背負って逃げる。みんなでそんなものは捨て逃げようと説得するが、頑として言うことを聞かない。空襲が終わってから、荷の中を見せてもらったら教科書やたくさんの参考書が入っていました。

　一生目に残るのは学徒出陣壮行会、朝暗い中に大粒の雨の中神宮外苑へ、男子学生の力強い行軍。男子学生の学生服も私たちの学生服も雨で濡れ色が落ち紺地の雨となった。どんな事があっても女子学生は銃後を守る、国を守ると決意する。戦後青春時代を無にしたと云う方もいるが、私達は良き青春だったと思う、目標があったから。

　３月休みの帰省中に３月10日の大空襲で校舎や寮が焼失。地元で待機との連絡を受け、北炭夕張炭礦院歯科にて研修。富田習朔先生と練也先生のご指導を頂戴しました。５月に再び上京、赤坂の高級料亭が宿舎となった。近くには皇族方のお屋敷があり常に営兵が立っていた。勉学というよりライオン工場などの軍事工場に報使の日々。山形から太田さんも到着、リックにお餅などの食料がいっぱい。夜中に空襲警報が鳴る、焼夷弾が雨の様、火の粉が吹雪の様に舞う。一緒に出た友人の足首に焼夷弾が当たった。幸い近い所に救護所があったのでお願いする。丁度軍のトラックが来て「学生さん達乗りなさい」と云ってくれて助かる。その代り荷台に火がついたら火打棒で払ってくれとの事、一生懸命棒を振る。空襲も終わりもう大丈夫でしょうと皇居のお堀ばたで降ろしてくれた。一面の焼け野原、土手の草原でひっくり返り餅を食べて、本郷の本部へ戻るが歩けど歩けど到着せず。やっとの思いでたどり着いたら本部は上野、院長もそちらにおられるとの事、兄が心配して汽車の切符とおにぎりを持って待っていてくれて北海道に帰る様に、しかし本部の許可がいるのでまた歩く、暗くなっても辺りは空襲の残り火で明るい。やっと到着したが、牛込寮で亡くなられた３人を荼毘している時だった。お参りして上野駅へ、帰夕後は再び炭礦病院へ、富田先生と女子歯科医専の入交院長とは交流があり、連絡を取って戴きそのまま研修する事となった。

　終戦の玉音放送は炭礦病院の広間で聞きました。２０年に再び上京、御茶ノ水の入交院長宅で口頭試問にて文部省試験を受け卒業証書の授与、文部省より歯科医師免許証お送り頂く。前期の文部省試験は空襲のためなし、なんとなくどさくさに紛れた歯科医師誕生。そして、故郷の炭礦病院に勤務、そこで主人と出会いました。

　駆け足で「青春時代」の思い出を語らせて戴きました。本当に怖い思い、悲しい思い、ひもじい思い、楽しい思い、様々な「思い」があります。ただ、一番云へるのは、「生きる希望」を一番実感できた事でしょうか。

編集：岩歯広報部　木村　悟1618

　この後、炭礦病院時代、結婚されてからの女性歯科医としての話が続きますが、紙面の都合で割愛します。最後にミツ先生から一言、「今の若い先生方、特に女の先生方に、戦時中は本当に怖い思い、悲しい思いをしました。ただ目標を見出せたので過ごすことができた。お子様達には、こんな怖い思いをさせないで、自分の目標を見出せるよう助言を与えてください」

　炭礦病院は患者数も多く私も早い時期から抜歯等外科的な症例を手がける事が多く、また容態の急変時など外科や内科の先生が来て下さり色々指導して頂けたので、何事もなく歯科医師を務めてこられたと思います。

　当時復員して来た木村先生（主人となる）が若いのに良くこれだけの事が出来るねと褒めてくれました。後に結納の入った日から仕事を止めるようにとの事。１０年後に主人の皮膚炎発症で治療室へ、隣の応接間に主人が横になり患者さんのカルテを持って指示して貰う。何せ私の時代の印象材はモデリングや石膏印象、それが寒天印象はモデルンになり、エンジンは豆腐を切るような軽さ、戸惑うばかりでした。

　主人が癌を発病後に長男重人が東京を引き上げ応援に、一時主人が退院、主人、重人、三男の悟、私と四人治療室に立った時は楽しかった。写真を撮っておけば良かったと思います。

　今は中の良かった東洋時代の友達も次から次と減っていきとうとう二人だけ。いたし方のないことですね。

は日本歯科出身で

その後続々と就職を求めてペンシルバニア大学、京城大学等色々な学校の出身の先生が来られた。当時労働組合の力が強く各礦山の分院にも歯科を設置、本院で10日程就業されてから各礦山へ就任されて行かれる。各先生より色々のお話を聞いたりご指導を戴く。

医長室と技工室は一緒で、当時の義歯はゴム床、技工士の平野先生がゴム床に小さく切った生ゴムを詰める手際の美しい事、ただ見ているうちに眠くなる。富田先生は当時からレジン床の研究をされていた様で、先生の診察は会社の部長級や課長級を対象とした特診のみ。昼休みには大きな火鉢にゴム床義歯の釜をのせるが、ネジの締めがゆるく爆発して部屋中煙になる事もあった。婦長さんも同じ年なのに全く落ち着き立派な人達でした。